

モンドラゴンの光と影

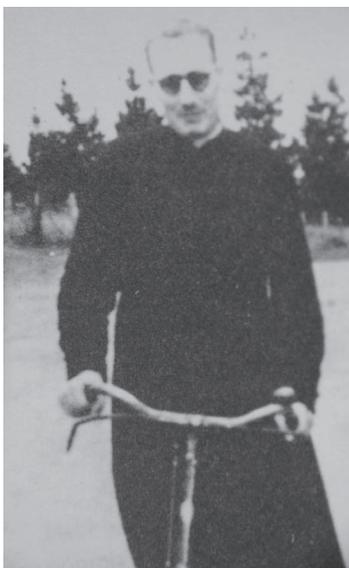
<その2>



石塚 秀雄

Ishizuka hideo

●非営利・協同総合研究所いのちとくらし 主任研究員



アリスメンディアリエタ神父

1. アリスメンディアリエタ小伝

(1) 少年時代

モンドラゴン協同組合を作り上げたのはまず教育であると第一回目で述べました。それを推進したのは創設者といわれるアリスメンディアリエタ神父です。ホセマリア・アリスメンディアリエタ・マ

ダリアガは1915年4月22日にバスク地方のビスカヤ県のモンドラゴンから約30キロの距離にあるマルキナという町のバリナガ教区（教会を単位した地区。自治体成立以前の共同体の形態）のイツルベという屋号の農家の長男として生まれました。ホセマリアという名前はキリストの両親の名前をつなげたものでマダリアガは母方の苗字です。バスクの農家はカセリオと呼ばれる自作農が主流です。

3歳の頃、家庭内の事故で左目の視力を失いながらもアリスメンディアリエタは教区学校に通いました。12歳（1927年）の時に農家の長子相続権を放棄して、ビスカヤ県にある予備セミナリオ（カトリック教会の学校）に入学してラテン語を学びます。16歳（1931年）のときにアラバ県の首都ビットリア（現在のバスク州都）の教会セミナリオ（神学校）のラテン語クラスの試験に合格、翌年、哲学

クラスに入ります。教師陣の中にはバスクの文化人類学者としてもっとも有名なミゲル・デ・バランディアランもいました。この頃からアリスメンディアリエタはバスク文化運動に関わりはじめます。

1931年4月には総選挙がありアルフォンソ13世が退位し、スペインの第二共和制がバスクの町オニャーテにおいて宣言されました。1932年9月に共和国政府はカタルーニアの自治権を承認しました。しかし、バスクの自治権の承認には至りませんでした。イエズス会は共和国政府により非合法化され、カトリック教会内部の矛盾も激化しました。時を同じくしてカトリック活動団（アクション・カトリカ）が新設されました。バスク地方では、カトリック教会においては社会問題に実践的に関わろうとする労働司祭あるいはプロパガンダ司祭と呼ばれる人々を多く輩出しました。

18歳（1933年）の青年アリスメンディアリエタは社会問題の資料やカトリック教会の社会正義の文書などを熱心に読み、カトリック運動系のバスク語新聞「エキン（企てるの意）」に協力するとともに友人たちと「バスク青年会」を組織しました。こうした若者たちの企ては、共和制に賛成しつつも、共和国政府から政治的に抑圧されるカトリック教会の新しい運動から大きく影響を受けたものといえます。ピットリアはそうした運動の中心地でした。

(2) 人格主義哲学に基づく協同組合思想

アリスメンディアリエタの協同組合思想を構成するいくつかの源泉を『アリスメンディアリエタの協同組合哲学』の著者ホセ・アスルメンディはつぎの4つの思想に要約しています。カトリック社会正義思想、ムーニエとマリタンの人格主義哲学、協同組合思想（主としてビッシェ、ランベールなどフランスとドイツの協同組合理論）、マルクス主義思想です。この中で人格主義のエマニエル・ムーニエ、ジャック・マリタンはともにカトリック思想家に分類されるフランスの思想家ですが、マリタンは後にナチズムから逃れて米国の亡命的移住をし1930年代以降に活躍しました。アリスメンディアリエタは協同組合と連帯の意味についてはもう一人のムーニエから学んだところが多いのです。

ムーニエ（1905-1950）がフランスで雑誌『Esprit（エスプリ、精神）』を創設したのが1932年、『エスプリ』はカトリック思想の雑誌というにとどまらずに、ブルジョア的個人主義に反対し、「コミュニテイ的人格主義、Personlisme Communautaire」を主張しました。1934年には反ファシズム監視委員会に参加しました。1936年に「人格主義宣言」を出版しました。ナチスのフランス占領で逮捕され1年間投獄されました。ムーニエは政治的には当時の人民戦線を支持し、ス

ペイン内戦についても共和国支持となりました。人格主義哲学は1950年代に日本に紹介されましたが、マルクス主義や実存主義に知的関心が集まり、あまり注目は浴びませんでした。



現在も発行されている著名雑誌『Esprit』

ムーニエは1950年に亡くなり、その影響力は小さなものとなりましたが、アリスメンディアリエタの思想の中では確実に継承されました。それは協同組合と連帯の思想です。人格主義哲学は一言でいえば人間個人の人格と社会を結びつけて考える哲学といえます。ムーニエは社会的連帯の手段として協同組合を重視していました。19歳のアリスメンディアリエタはフランスの哲学雑誌『エスプリ』を読み始め、掲載された各種論文に大いに啓発されたことは想像に難くありません。モンドラゴン協同組合原則の重要な項目である「労働の概念」「労働の人間化」「労働の資本への優越」「コミュニテイの

社会変革」などの文言はムーニエの哲学思想の影響を受けたものと推測されます。

(3) スペイン内戦

1933年6月には、共和国政府は「宗教団体法」を作り、教会勢力の抑圧を図ります。また同年8月にはバスク自治州案が作られました。1935年8月に農業改革法とともに大土地所有の一掃が図られます。そうした中で右派は軍事組織を作り、右翼団体のファランヘ党を結成します。各地で暗殺や小規模な武力衝突などが発生し始めました。1934年8月にはモンドラゴンで労働者の反乱が起き、当時町を中心企業であった鉄鋼会社ユニオン・セラヘラの社長らが殺害されました。

1936年1月にスペイン人民戦線が結成され、6月にはついに内戦が勃発、バスクは共和国政府側につき、フランコ將軍の率いる反乱軍と対立しました。21歳の青年アリスメンディアリエタは同12月にバスク民族党の主導する軍に徴兵され、故郷マルキナの近くに配属されました。その後、軍事新聞「グダリ（兵士）」の編集に回され、宗教的社会的問題を担当しました。

スペイン内戦はバスク地方が最初の重要な戦場になりました。バスク地方はカタルーニアやマドリッドとならんで反フランコの政治的な重要拠点であると同時に、重工業地帯であるビルバオを支配

できるかどうか内戦の行方を決するとされていたからです。北部戦線では、はやくも1935年9月にサンセバスチャンが反乱軍に占領され、ついで、ビルバオへ侵攻する途上にあるモンドラゴンの町も陥落しました。スペイン内戦は双方で戦争捕虜を許さないという過酷なものでした。バスク地方での戦闘が一進一退であったことは、ドイツ軍による有名なゲルニカ爆撃（1937年4月30日）、ビルバオの陥落が7月19日となったもののモンドラゴン陥落から実に約1年近くかかったことから見取れます。



破壊から生き残った「自由の木」

アリスメンディアリエタはビルバオ陥落を受けてビルバオからフランス国境に近いサンセバスチャンへ敗走し、王党派カルリスタ軍に紛れ込んでビルバオに舞い戻ったところで捕まりました。新聞編集の仲間は死刑となりましたが、神学生であることが幸いしたのか、しばら

くして釈放され窮地を逃れました。内戦は1939年1月にカタルーニア地方が陥落して終了しますが、反フランコの重要拠点としてのバスクの戦争はビルバオ陥落をもって基本的に終わったといっよいでしょう。

(4) 司祭に叙任

内戦が終わり、アリスメンディアリエタはビットリアの神学校に戻りました。バスク司祭の多くが共和国側に加担した罪で追放されていました。アリスメンディアリエタは哲学運動やカトリック社会運動などに参加しながら、4年間の神学コースを修了して1940年12月にビットリアで司祭に叙任されました。ベルギーのルーベン大学で社会学の勉強を続けるべく準備を進めていましたが、モンドラゴンの町の中心地にあるサンファン・バウチスタ教会の助任司祭として赴任するよう命じられました。モンドラゴン協同組合グループの歴史もここから始まることになるのです。

モンドラゴン協同組合グループの最初の協同組合であるウルゴールが設立されたのは1956年でした。ウルゴールというのは設立した5人の若者の名前の頭文字をとったものですが、この若者たちは、アリスメンディアリエタが教えていたウニオンセラヘラ会社の徒弟学校の生徒でした。1941年にモンドラゴンの町に青年

カトリック活動団を組織したアリスメンディアリタのところに集まってきた少年たちであり、アリスメンディアリタは彼らをさらにサラゴサにある技術学校で学ばせます。

したがって、モンドラゴン協同組合の誕生までに15年間の教育の苗床の期間があったといえます。1943年に青年アリスメンディアリタはカトリック活動団の一環として、モンドラゴンの町の若者たちを対象にしたいくつもの新聞、情報誌を発行し、まずスポーツ青年団を作りました。彼は1枚1ペセタのサッカー籤を販売し2万ペセタを集めて、1945年にはサッカー場をつくります（これが後の技術専門学校の敷地となる）。また、フライレの教育学理論である「教育は働きながら学ぶ」、「教える者は教えられる」という理念と共通する「実践的教育」の下、地域の若者たちに労働の場を創出するために、地域の企業とどのように協力するかという考えに基づいて1943年10月にモンドラゴン労働学校の計画を打ち出しました。

34歳（1949年）の時に「文化教育連盟」を設立しました。これは社会と企業と人々の働き方と教育文化を統合的に改革していこうという、アリスメンディアリタのそれまで考えてきたことの一つの実践的成果といえることができます。一方、同年12月に技術学校設立の認可を教育

省から得ました。1956年にはアリスメンディアリタがウルゴールを協同組合に登録するまで手続き的な支援を行った最初の労働者協同組合ウルゴールが設立されました。またアリスメンディアリタは町に数多くの文化サークルやスポーツクラブの設立運営に関与しました。

1960年アリスメンディアリタは雑誌「協同」を発刊しました。これは現在のモンドラゴンの機関誌「TUランキデ（労働と団結、働く仲間）」として続いています。またモンドラゴンの工業協同組合は着実に拡大しました。スペイン政府は、それを地域経済開発モデルとして評価しました。当時のスペインは一切の政治的自由のない独裁政権のため、EEC加盟は拒否されていました。そうした中でモンドラゴンの動きは内発的なモデルとして注目されたのです。

(5) 参加型産業主義モデルとしての モンドラゴン

モンドラゴン協同組合はスペイン民主化の動きとともに新しい社会的経済的な運動である参加型産業主義モデルとして注目されはじめました。1968年にはフランスの社会的経済学者H.デロッシュがモンドラゴンについて書いています。1969年にはモンドラゴンの地域生協が合併してエロスキ生協が設立されました。

1973年にはイギリスのオークショッ

トが『モンドラゴン、スペインの民主主義のオアシス』という本を出しました。これによりモンドラゴン協同組合は一気に世界的な注目を浴びることになります。1975年にはアメリカの社会学者W. ホワイトが研究調査に訪れ、その成果は1988年に『メイキング・モンドラゴン』という本として出されました（邦訳『モンドラゴンの創造と展開』、日本経済評論社）。アリスメンディアリエタは1976年に五回目の心臓手術を受けますが、11月にモンドラゴンで61歳の生涯を閉じました。



筆者も翻訳に参加した『モンドラゴンの創造と展開』

2. アリスメンディアリエタの協同組合哲学

(1) どのように形成されたか

アリスメンディアリエタは協同組合を学者のように研究対象としたのではなく、また多くの実践家のように経営や実践的課題への対応に主たる関心をむけたわけでもありません。彼は神父であり、在俗の存在である協同組合の運営に直接関わ

ることはありませんでした。しかし、アリスメンディアリエタはモンドラゴン協同組合の創設者とみなされ、そのビジョンを示し、モンドラゴン協同組合の防衛に奮闘した人物という意味では、まさに協同組合運動の師匠でした。

アリスメンディアリエタの協同組合についての関心は、当時のバスクカトリックの社会的正義の理論と、ムーニエとマリタンの人格主義哲学が直接的な理論的な基盤となっています。そしてなによりも当時のバスクの政治的社会的経済的状況が協同組合運動への大きな誘因となったといえます。先に述べたローマ法王の1891年と1931年の二つの回勅は社会問題について人間の尊厳をキーワードにして、資本主義と自由主義に反対し、また社会主義と全体主義に反対する、第三の道を示すものでした。とりわけ労働者協同組合についてはフランスのP.ランベール(1912-1977)の文献を読んでいたと思われる。ランベールは中南米の労働者協同組合運動の理論的支柱の1人ともなりました。ランベールの協同組合運動を連合体として進めるという考えはモンドラゴン協同組合運動にも少なからず影響を与えているのです。

(2) さまざまな批判を受ける

スペインのフランコ独裁政権は、1960年代に入ってから、次第にはころびを生

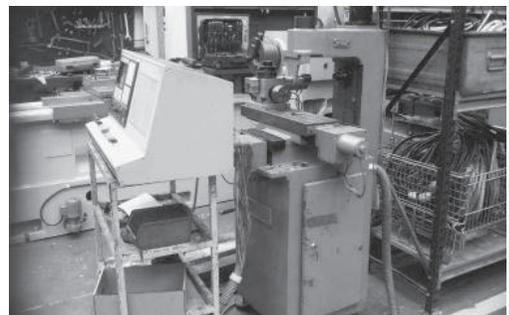
じます。ヨーロッパの中で政治的経済的に孤立することは次第に困難になってきました。また1968年にはバリ五月革命、プラハの春などが起きました。スペインにおいても少しずつ独裁政権崩壊のエクスターにむけて、非合法ながらも政治運動が活発化したのです。

そうした中で、徐々に拡大しつつあるモンドラゴン協同組合にたいして、政治的批判が旧左翼や新左翼、ETA（「バスクと祖国と自由」、民族自立政治組織。現在では一般的にはテロリスト組織と見なされている）などからの批判がなされ、アリスメンディアリエタはそれへの理論的な対応を迫られました。旧左翼とは主としてマルクス・レーニン・スターリン主義者たちで、労働者協同組合にたいしていまでもなされるような批判をしてきました。すなわち、労働者協同組合は、階級闘争を否定するプチプルの運動であり、労働者を搾取し、私的所有を肯定しているという批判です。

アリスメンディアリエタが政府から、協同組合運動による地域振興を理由に労働金メダルを授与されたことも批判されました。また労働組合主義者からもモンドラゴン協同組合に対して批判が行われました。アリスメンディアリエタは労働組合主義を認めていましたが、労働の問題は労働組合主義だけでは解決しないと考えていました。つまり社会での働き方

は賃労働だけではないと考えていました。つまり、働く人々には農民・漁民・自営業者・協同組合労働者など多様な形態があると考えていました。また、バスク独立派といわれるETAは、1965年に武装闘争派（ETA6）とそうでない派とに分裂しましたが、ETA6からはモンドラゴン協同組合は「労働者階級とバスク民族への二重の裏切り者」と批判されました。

また新左翼と言われる新マルクスレーニン派等からはモンドラゴン協同組合は「スペイン新植民地主義の手先」と批判されました。また、外部からの批判とは性格が異なりますが、内部からの批判も起きたことがあります。それは1972年のアレコープの組合員資格問題です。アレコープとはアリスメンディアリエタが働きながら学ぶという協同組合教育、またフレイレの教育学などにも共感して1966年に作った勤労学生工業協同組合です。その卒業生の一部が卒業後も組合員として残りたいと主張し、反対するアリスメンディアリエタが批判され、結局、定款の改正で解決しました。



アレコープ工場内の機械設備

1974年のファゴールのストライキ問題のときも、協同組合における官僚主義が議論の焦点となり、アリスメンディアリエタも、現在の表現でいえば、経営陣と一般組合員における参加形態とガバナンスの改善につながる議論を進めた結果、除名された組合員たちはその後職場に復帰しています。こうした出来事は、スペイン全体の政治的な変動期と重なりながら発生したのが特徴的です。こうしてアリスメンディアリエタの晩年に当たる数年間も主として左翼からの批判にさらされながらも、その中で自らの協同組合哲学を深化させていきました。

青年アリスメンディアリエタはモンドラゴンで学校を作り、多数の文化サークルを作り、さらに年を重ねたアリスメンディアリエタは工業協同組合、協同組合銀行、共済組合、女性協同組合、勤労学生協同組合などを作るために主導的な役割を果たしました。そのために、中央政府や当時のバスク県当局と交渉をしました。

(3) 協同組合の師匠

アリスメンディアリエタは独裁政権の下で、地域社会と地域住民の経済的社会的活性化を図ったのです。ムーニエとマリタンの人格主義哲学をさらに発展させ、モンドラゴン協同組合グループの発展を作り出し、そこでは労働の人間化が人格

の尊厳を実現し、経済と社会をともに変えることが真の社会変革であるという**次のメッセージ**を残しました。現在もなおモンドラゴン協同組合の創設者として精神的な師匠として尊敬されているのです。

手と手、心と心、新たなるものを求め

労働により結びあい、労働を通じて

私たちの小さな土地は

みんなにとってより人間的なものに作り上げられる。

誰も奴隷でなく、また誰の主人でもない。

みんなはみんなのためにある。

人間的に進歩的に結びあうことにより

人々は人々の力で立ち上がるのだ。

石塚 秀雄 (いしづか・ひでお)

- ・非営利・協同総合研究所いのちとくらし・主任研究員
- ・社会政策論、ヨーロッパ社会的経済研究、モンドラゴン協同組合研究
- ・最近の著書に『地域医療再生の力』（共著、新日本出版社）、翻訳に『フランスの社会的経済』（日本経済評論社）

モンドラゴンの光と影（前号目次）

1. 初めにバスクありき
2. モンドラゴンの概要
 - (1) モンドラゴンとは町の名前
 - (2) 世界に類を見ない協同組合複合体
 - (3) グループ設立は1956年
3. スペインにおける協同組合の歴史
4. スペインの協同組合の形成
5. 労働者協同組合としてのモンドラゴングループ
6. バスク協同組合運動の思想的背景